

地域連携・国際センター一年報

平成 23 年度地域連携・国際センターの主な事業報告

1. 地域連携国際センタープロジェクト関連事業

(1) 看護専門職員研修

【救急看護認定看護師教育課程】

救急看護認定看護師制度は 1996 年に発足し、1997 年に救急看護認定看護師が誕生している。本教育課程は 2005 年に教育機関として認定を受け、2011 年までの 7 年間で 67 名の修了生を輩出した。

1) 概要

開講期間は 6 月 2 日（木）～12 月 2 日（金）までの 6 ヶ月間であった。受講者は 8 名（定員 10 名）であり、全国から参集した。

2) 内容

科目と時間は日本看護協会の基準カリキュラムを基に作成した。

(1) 共通科目 120 時間

共通科目はリーダーシップ、情報処理など、すべての認定分野で必要とされる事項について受講する。2011 年度からは選択共通科目として対人関係が追加となった。

(2) 専門基礎科目 120 時間

専門基礎科目は 1) ヘルスアセスメントとケア、2) リスクマネジメント、3) 救急技術の理論と実践の 3 科目から構成される。ヘルスアセスメントとケアではフィジカルアセスメントについて学習した後、小児、妊産婦、高齢者のそれぞれ発達段階に応じたアセスメントについて学んだ。また、リスクマネジメントではミスの起きやすい救急医療の場で、安全な医療、看護を提供するために認定看護師としてどのような行動をとるべきかについて学習を深めた。

(3) 専門科目 180 時間

専門科目は 1) 救急看護概論、2) 救急看護技術、3) 病態とケア、4) 救命技術指導、5) 災害急性期看護の 5 科目から構成される。救急看護技術では早期のリハビリテーションを行う意義や実際の手技を学んだ。また、救命技術指導ではグループに分かれ、ディスカッションを行いながら指導案、教材の作成に遅くまで残って取り組む姿が見られた。

(4) 演習及び臨地実習 255 時間

2011 年度の臨地実習は青森市、弘前市、八戸市、岩手県の 4 施設で行った。これまでの講義、演習での学びを統合しつつ、各施設ですでに活躍している認定看護師の姿を見ながら、将来の自分自身の認定看護師像をつくりあげていた。

その後の事例検討会、ケースレポートでは、臨地実習で得た学びを他者へ伝える過程を通じて救急看護に対する考えを深めることができた。

文責：佐々木雅史

【認定看護管理者教育課程（セカンドレベル）】

1. セカンドレベル実施概要

平成 23 年度は、セカンドレベルの教育課程を開講した。

- 1) 日程：第 1 クール 平成 23 年 6 月 16 日～7 月 1 日
第 2 クール 平成 23 年 7 月 14 日～7 月 29 日
第 3 クール 平成 23 年 8 月 19 日～9 月 2 日 全 32 日間（192 時間）
- 2) 受講生：36 名（修了生 36 名）
副看護部長等 4 名、看護師長等 27 名、看護主任・副看護師長等 5 名
青森県内 32 名、県外 4 名 女性 36 名、男性 0 名
- 3) 内容：
 - ・カリキュラムは、「医療経済論」、「看護組織論」、「人的資源活用論」、「情報テクノロジー」の 4 つの教科目からなり、講義と演習で構成している。時間数は規定の 180 時間のほかに、オリエンテーション・プレゼンテーション等 12 時間を加え、計 192 時間であった。
 - ・講師は、県内外の専門分野の教育・研究・実践者が担当し、学内の教員の協力も得た。
 - ・学習方法は、成人学習として主体的に展開することを目指し、講義、演習、ディベート、プレゼンテーションを取り入れた。
 - ・演習・課題レポートのテーマは「自分が所属する組織(病院／看護部／病棟等)における問題点を分析し、改善計画を立案する」とし、教育課程での学びと実践を統合できるよう支援した。

2. サードレベルフォローアップ研修

- 1) 目的：自らが立案した組織の改善計画の実施を推進するとともに、セカンドレベル修了生の看護管理実践能力の向上を目的とする。
- 2) 開催日：平成 24 年 2 月 18 日（土）
- 3) 場 所：浅虫温泉 ホテル秋田屋
- 4) 参加者：平成 23 年度セカンドレベル修了生 30 名、演習支援者 6 名、
県内の認定看護管理者、修了生の所属施設の関係者、セカンドレベル・サードレベルの修了生 16 名 計 52 名
- 5) 研修内容：セカンドレベル研修終了後の実践状況報告およびコンサルテーション

2. 研修科事業報告

- ・平成 23 年度の研修科事業の概要

(1) 第 11 回ケアマネジメントフォーラム IN 青森

1. 企画の背景

対人援助職（ケアマネージャー）の役割は、ますます重要になってきているが、現場においては、一人で困難ケースの対応を判断し、援助していることも少なくない。対人援助職（ケアマネージャー）をサポートするスーパーバイザーを確保することも困難である。この研究企画は、対人援助職（ケアマネージャー）の日々の職務に役立ち、開催の意義は大きいと考える。

2. 研修目的

地域住民を支援する保健医療福祉専門職を対象として、実践報告などを通して、対人援助職（ケアマネージャー）としての資質向上を目的とする。

3. 研修受講者

保健医療福祉専門職：72 名

4. 開催日時および場所

平成 23 年 11 月 25 日（金）13：00～16：00 青森県立保健大学 大講義室 A2（A111）

5. 研修内容

テーマ：「災害対応について考える－東日本大震災発生から－」

形式：基調講演、シンポジウム

1) 基調講演 「震災等における要援護者への災害対応マニュアルの活用」

講師 日本介護支援専門員協会 会長 木村 隆次 先生

2) シンポジウム 「災害対応について考える

－東日本大震災発生後の対応の実際と課題－

座長： 木村 隆次 先生 （日本介護支援専門員協会 会長）

シンポジスト： 奥田 博子 先生 「災害時の地域支援」

（国立保健医療科学院 生涯健康研究部 特命上席主任研究官）

宮古 道子 先生 「被災地支援活動に参加して」

（三沢市健康福祉部介護保険課介護保険係

青森県社会福祉士会理事 社会福祉士）

その他： ミニレクチャー 「東日本大震災ボランティア活動の紹介－本学の取り組み－」

青森県立保健大学 看護学科 3年 内田芽惟・長内志織・気仙未来

2年 瓜田崇平・敬礼宏子・丸山智美

6.研修の成果および評価

研修会終了後、アンケート調査を実施した。参加者72名のうち、54名（回収率75%）から回答をいただいた。研修の満足度は、「満足した」43%、「やや満足した」50%であった。今後の職務に「役立つ」33%、「役立つかもしれない」20%で、研修会の評価は概ね良好であった。理由としては、「講師が良かった」、「内容が充実していた」との評価が多数を占め、充実した研修会になったと言える。

検討すべき意見として、「ディスカッションの時間が少なかった」、「冬期は早めに終了して欲しい」など、時間的な問題の指摘が見られた。

7.反省点（次年度への改善点など）

参加者数は、前年度同等であったが、「震災」をテーマとし、ケアマネージャー、社会福祉士、保健師の各専門家を招いた事で、非常に関心を持ち受講された方が多かった。そして、内容が充実していたとの高い評価も得られた。一方で、時間的な問題の指摘があったため、シンポジストの発表時間や進め方、開催時期については、次年度に向け検討していくべきである。また、アンケート結果に基づき、受講者の要望に応えるべく、シンポジウムの内容、運営方法等を十分に考慮し、今後もより良い研修会の開催に向けて検討していく。

(2) 卒業生を対象とした研修会

地域貢献の一環として、本学の卒業生を対象としたリカレント教育の実施を企画した。本年度は、各学科で企画し、実施された。事業は以下のとおりである。

<3 学科合同>

- 1.テーマ：「おもてなしの心を身につける接遇研修」
- 2.日時：平成23年10月8日（土）13：10～15：10
- 3.場所：C棟2階N講義室1
- 4.講師：三塚浩二氏（株式会社コンクレティオ）
- 5.参加者：卒業生9名（看：5、理：1、社：3）、在校生5名、教員4名 合計18名

6.アンケート結果

回答者数は、参加者18名のうち14名であった。

所属は、総合病院2名、専門病院1名、保健所2名、その他7名（大学、特養）。

従事している職種は、看護師2名、保健師3名、理学療法士1名、社会福祉士1名、その他（教員、学生、ケースワーカー）である。

開催時期について、「よい」11名、「どちらとも言えない」2名、「別がよい」1名であった。開催時期について、「学祭の日とずらしてほしい」との意見があった。

時間配分について、「長い」1名、「ちょうどよい」11名、「短い」1名、その他として「時間を守って欲しい」との意見があった。

内容について、「非常によい」5名、「よい」9名。

今後の活動に役立つかという質問に対して、「非常に役立つ」9名、「まあまあ役立つ」5名であった。

来年の参加について、「ぜひ参加したい」2名、「できれば参加したい」11名、その他「内容による」との意見もあった。研修で取り上げて欲しいテーマ等について意見を聞いたところ、「メンタルヘルスについての研修を希望する。」という回答があった。

7.まとめ

今回は大学祭の期間中に日時を設定し、同窓会への出席後に参加できるようにと考え開催したが、同窓会への出席者も少なく、また同窓会が予定より早めに終わってしまったこともあり、ほとんどの人が帰ってしまい卒業生の参加が少なかった。また大学祭であったために在校生の参加も少なかった。

研修会の内容については、参加者がペアになってのエクササイズが多く、また医療福祉関係者としての接遇に関する考え方や言葉の使い方など実際の場面で活用しやすい内容であったため「良かった」「役立つ」との感想が多かった。しかし、2時間の時間設定では短かったように思われる。

今回は卒業生が参加しやすいように大学祭と同時期に日時を設定し、3学科合同での開催としたが、昨年と比較しても大きな参加者の増加にはつながらなかった。

今後の研修会運営についてどのようにしていくか再度検討が必要と思われる。

(3) 研修企画・実施助成事業

県内の保健医療福祉専門職を対象とした研修企画を募集し、助成を行った。採択された研修企画については事業実績報告参照のこと。

(4) 教育改善研究助成

本学の教育方法等の改善に資するための研究課題を募集し、助成を行った。採択された研修企画については事業実績報告書参照のこと。

(5) ブックレット作成事業

本学教員の研究成果を県民に還元することを目的として、継続的な小冊子の発行を昨年度に引き続き行った。発行されたブックレットについては事業実績報告書参照のこと。

福祉・介護職場におけるリスクマネジメント

—危険予知トレーニング(KYT)と根本原因分析(RCA)の実際—

企画提案・実施者 岩月宏泰¹⁾・桜木康広¹⁾・成田秀美²⁾

1) 青森県立保健大学, 2) 弘前医療福祉大学

1. 企画の背景

現在、福祉・介護職場では介護福祉士、理学療法士、作業療法士などの専門職種が利用者に専門的なサービスを提供している。利用者が安心して利用できる安全なサービスを提供するためには、職員に対する継続した福祉・介護に係わる安全教育が必要不可欠であるが、現状はこれら教育に多くの時間を割くことが困難である。

2. 研修目的

本研修では企画提案者、桜木康広講師及び成田秀美氏が講師となり、県内の福祉・介護職場に勤務する職員（介護福祉士、理学療法士及び作業療法士）40名を対象に危険予知トレーニング(KYT)と根本原因分析(RCA)の実際を修得させることを目的に企画された。

3. 研修受講者

職種：理学療法士、作業療法士及び介護職員

受講者数：基礎編 18人、応用編 19人（のべ参加者数 37人）

4. 開催日時および場所

開催日時は平成23年8月28日（日）午前9時から午後4時までであり、場所は本学B109であった。

5. 研修内容

平成23年8月28日（日）

午前；基礎編

9-10時；介護・福祉職場で発生する事故（講義） 担当：桜木康広

10-12時；KYTの基礎と実際（演習） 担当：成田秀美・岩月宏泰

午後；応用編

13-16時；RCAの基礎と実際（演習） 担当：岩月宏泰・成田秀美

6. 研修の成果および評価

本研修の受講者は基礎編（18名）、応用編（19名）であり、職種は双方とも介護福祉士などの介護職が6割を占めた。両方の研修終了後に無記名自記式の質問紙調査（留め置き法）を実施した。このうち、KYTとRCAについての講義に対する感想で、「よく解った」または「少し解った」を選択した回答者は、各々17名（94.5%）、14名（73.7%）であった。また、同様に演習に対する感想で、「よく解った」または「少し解った」を選択した回答数は、各々17名（94.5%）、12名（63.1%）であった。KYTについての講義及び演習に対する理解度は無回答1名を除く全員が高かったものの、RCAにおける講義の理解は70%以上と高かったが、演習で行ったステップ毎の分析については約60%に留まった。

7. その他

今回、本研修の助成決定通知が遅れたために、当初の研修日程の変更を余儀なくされ、募集期間も短かったために、各研修受講者の受け入れ予定40名に対して19名に留まった。

管理栄養士臨地実習受入施設指導者セミナー

齋藤長徳¹⁾、清水亮¹⁾、熊谷貴子¹⁾、森永八江¹⁾

1) 青森県立保健大学 健康科学部 栄養学科

1. 企画の背景

この研修企画は北東北で初めての管理栄養士養成が本学で始まり、昨年度より公衆栄養学、給食経営管理論、今年度より臨床栄養学の臨地実習が始まった。しかしながら受入側の特定給食施設等においては、管理栄養士の養成校からの実習生を指導するにあたり、戸惑いを見せている。今まで経験している栄養士養成校の学外実習との違いに困惑さえしている。そこで本学の臨地実習受入施設を対象に、養成校としての教育目標やその実習プログラム等を説明し、意見交換を行うことで、お互いに協力し合い、今後のより実践的な管理栄養士育成に寄与するようセミナーを企画した。

2. 研修目的

臨地実習受入施設の指導者の管理栄養士・栄養士の受入プログラムのへの迷いを払しょくするとともに、管理栄養士の受入施設としてのスキルを向上させ、より実践的な管理栄養士を生むことを目的に、本学管理栄養士養成臨地実習担当教員と受入施設指導者が一堂に会し、研修および意見交換を行った。

3. 研修受講者

職種：県内特定給食施設管理栄養士

受講者数：老人保健施設；5施設5名 病院；11病院14名 計19名

4. 開催日時および場所

平成23年12月3日13:00～16:00 青森市便化観光交流施設 ワラッセ

5. 研修内容

給食経営管理臨地実習および臨床栄養学臨地実習を中心に養成校としての教育目標や実習カリキュラム、実習受入のメリット、学生教育における心構え、受入準備および諸手続き等について説明。その後意見交換をした。説明は、本学給食経営管理臨地実習、臨床栄養学臨地実習教科担当者が行った。

6. 研修の成果および評価

本研修会を開催し、各特定給食施設の管理栄養士業務の振り返りも含め、施設全体の栄養管理および給食経営管理を再認識していた。その上で、管理栄養士養成への協力等について意識の高揚が見られた。

【意見交換より】一部抜粋

- ・実習の受入に対し、要点が確認できた。
- ・現在の養成カリキュラムが理解できた。
- ・実習の受入施設としての問題処理が整理できた。
- ・今後受入ができるよう準備する。

7. その他（改善検討事項、特記事項など）

今回、参加者からは、継続を促されるなど好評であったが、病院関係の研修会がいくつか重なるなどし、参加者が少なかった。今後企画する際は、種々のことに配慮し、企画運営を進めたい。

研修名 : Nursing Simulation in Aomori Part 2

シミュレータを活用した看護教育システム設計：一步進んだ

患者急変対応スキルからの新たな発見！（Oncologic・EMERGENCY を中心に）

企画提案・実施者：○織井優貴子、藤田あけみ、長内志津子、大崎瑞恵、佐々木雅史¹⁾

1) 青森県立保健大学

1. 企画の背景

本企画は、平成21年度に看護師、看護教員を対象として実施した「シミュレーション看護教育(患者急変対応)」の企画が好評であったことから、第2弾として高性能シミュレータを用いた患者急変対応スキルを「がん化学療法を受けている患者の急変対応コース」として、がん化学療法に携わる看護師を対象として講義およびハンズオン形式で実施する。

2. 研修目的

- 1) がん化学療法を受けている患者の急変対応におけるシミュレーション学習の必要性を理解する。
- 2) 看護教育・看護師育成に必要なシミュレーショントレーニングの設計と実践方法が理解できる。

3. 研修受講者

職種：看護師(がん化学療法認定看護師中心)

受講者数：修了者数 1回目13人、2回目12人(のべ参加者数 25人)

4. 開催日時および場所

開催場所：青森県立保健大学 A棟 4階看護学科研修室、カウンセリング実習室

開催時期：9月24日(第1回目) 2月19日(第2回目)

開催回数等：2回 ※この研修は2回の講義および演習に参加する事が必要。

5. 研修内容

9月24日：講義：第1回「オンコロジックエマージェンシーとは」(織井優貴子)

演習：化学療法中に起こった急変事例検討、事例に基づいた患者急変対応シナリオ作成(藤田、長内、大崎；補助)

2月19日：講義・演習「急変対応プログラム」の作成(グループワーク)：織井優貴子、

演習：急変対応シミュレーション演習、織井(藤田、大崎；補助)

6. 研修の成果および評価

・アンケートは参加者の100%が本研修に参加して良かったと答えている。参加者の背景を明確にし、少人数のグループワークを中心とし、教員の助言も有効であった。今後も継続してセミナーを企画してほしいという意見が100%であった。

・演習時間を長くしてほしい(特にシミュレータを用いた演習)という要望があった。

7. その他(改善検討事項、特記事項など)

- ・開催時期について：2回の開催は良いが、時期を検討する必要がある。
- ・高性能シミュレーターを使用する実習室の確保
- ・シミュレータに使用する備品の整備、保管・管理

「ボランティア活動支援論」のテキスト作成

千葉たか子¹⁾

1) 青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科

1. 研究の背景

本研究は、本学社会福祉学科の授業科目であるボランティア活動支援論のテキストとなる資料集の作成である。

本科目のねらいは、学生個々人のボランティア観をはぐくむこと、ボランティア活動の一層の普及・推進にあると考える。この点で、既刊の文献はボランティア活動の実践者からの報告や、研究者のボランティア観の議論などが中心のものが多く、ボランティアの理念や現代社会の中での位置づけの議論、あるいは近代社会の理解や国際社会の課題である貧困などを広汎に渡って扱っているものは少なく、教科書として採用するには片寄っているきらいがあった。

そこで、本授業により資するようなテキスト作成の必要性が背景にあった。

2. 研究目的

本研究の主たる目的は、ボランティア活動支援論の授業に使用できる内容・段階の資料集を作成することである。

ボランティア元年といわれる1995年以降、ボランティア（活動）は市民権を得た感があり、NPO法の成立もあり、また一方では市民との協働による地域社会づくりなどがうたわれ、ボランティア（活動）を取り巻く環境は進化していると言える。しかし、それだけに、ボランティア（活動）を近代社会における市民の活動として捉えることの重要性が増している。

本資料集は、学生個々人が、各自のボランティア（活動）観を構築することができるように、様々な視点を提示し、また地元青森県内のボランティア（活動）・NPO活動についての情報を盛り込むことにより、より質の高いボランティア活動を展開するのに資することをねらいとした。

3. 研究成果

本テキストは、第1章で、学生個々人がそれぞれのボランティア（活動）観を構築できるように、何人かの研究者のボランティア（活動）の定義・概念を取り上げた。第2章では「困っている人がいれば助け合う」という人間としての自然な相互扶助の働きを、歴史の中に概観した。第3章ではボランティアが集まる組織・団体の形態・機能・種類などについてまとめた。第4章には、ボランティア（活動）を「新しい市民の活動」として位置づけるため、「近代社会」に関する項目を取り上げた。最後の第5章では「貧困」を考えた。「貧困」の背景にあるのは必ずしも経済的な理由だけではないものの、「貧困」に対する理解は不可欠である。

以上のように、本資料集では、この研究の目的が達成できるような項目を総括的に取り上げた。

また、本学の学生の興味・関心・必要を勘案した構成・内容としたので、授業及び自己学習において、効果的に使用できると考え、この目的は達成できたと考えている。

4. 研究成果の公表および活用

このテキストが利用されるのは、主に当該科目の授業においてであるが、その他、学生の学習にとっての基礎資料として有効であると期待される。ボランティア（活動）とは、畢竟市民社会に位置づけられるものであり、ボランティア（活動）の普及・推進につながることで、それはまた地域社会に貢献できる人材育成という本学の教育目標にも適うものである。

本学で行われる研修会・講演会・大学祭等の折にも利用でき、有意義な参考資料になることが期待される。

学生のコミュニケーション能力向上におけるコーチングの活用

藤田智香子¹⁾ 岩月宏泰¹⁾

1) 青森県立保健大学理学療法学科

1. 研究の背景

理学療法士は対人援助職の1つであり、利用者との意思疎通は必要不可欠である。しかし、近年学生のコミュニケーション能力は、本学のみならず全国的に低下傾向を示し、他者との交流に苦手意識を持つ学生も少なくない。実際、学外実習等の臨床場面で、利用者や指導者等とうまくコミュニケーションが取れず、臨床実習継続に支障を来すケースも見受けられる。そこで我々は、臨床実習前の学生のコミュニケーション能力を向上させるための手法としてコーチングに注目した。

2. 研究目的

コーチングはビジネス領域でさかんに導入されており、近年医療分野の教育でも取り入れられ始めている。この教育手法は自発的な行動を促すコミュニケーションスキルであり、学生がコーチングを学び、コミュニケーション能力を高めることができれば、臨床実習だけでなく将来理学療法士として働く上でも非常に有用と考えられる。そこで、コーチングを用いた学生のコミュニケーション能力向上に関して、その効用および教授方法・内容の妥当性について検証することを目的として本研究を行う。

3. 研究成果

【方法】研究協力者を公募し、本研究への参加に同意した本学理学療法学科3年生10名と1年生5名を対象とした。コミュニケーションスキル尺度、特性自己効力感尺度、対人的志向性尺度からなる独自の調査用紙を用いた事前調査後、コーチングの模擬授業で基本的内容を講義し、臨床場面を想定した実践的内容でロールプレイした。模擬授業後に学習内容・方法に関する事後調査を行った。

【結果・考察】事前調査結果から、本研究対象者は他者を受け入れる姿勢を既に備えている反面、自己主張はやや弱く、対人関係に敏感で他者の行動の変化に関心を寄せる傾向が強いことが推察された。

模擬授業の実習での学生相互評価は、3年生は既知の講義内容と重複する部分もあり、理解しやすく、高評価であったと考えられる。1年生では実習1～3で「よくできていた」が少なく、知識の理解にやや時間を要し、難しく感じられたと考えられる。また、1年生は理学療法の実践的なイメージが少なく、実習課題も一部学内の設定に置き換えたが、戸惑った部分があったと考えられる。

模擬授業後の内容に関する調査からは、すぐには難しい所もあり慣れが必要だが、日常的に意識することで可能と思われる内容であることや臨床実習だけでなく、普段の生活で役立つ内容と認識されたことがわかった。学習方法に関しては、DVDの有用性が多く挙げられ、講義で聞いた知識をDVDの事例で具体的に理解でき、実習への展開がより容易になったと考えられる。また、小単元毎の講義後DVDで事例を視聴し、臨床場面等を想定したロールプレイによる段階的な学習も好評で有効であった。ロールプレイは同級生でよかった反面少し気恥ずかしかったものが多く、やりやすさとやりにくさが同居していたことが伺える。また、1年生では患者役が難しかった点もあり、課題内容を再考する必要があると考えられる。

総合的に今回実施したコーチングの模擬授業は実践的なコミュニケーション・スキルを学習できる内容・方法であったと考えられる。また、自分自身のコミュニケーションを見直す機会となったことも伺え、自分の苦手なあるいは不足している部分を知り得る好機であったともとらえられる。但し、今回の対象者は少数であり、対象者を増やして同様の結果が得られるかなど再検討する必要がある。また、事後調査結果から学習内容・方法について、貴重な意見や要望などを得たので、今後実習課題の内容や説明方法・資料などについて再検討し、より実践的で有用な授業が展開できるよう改善を図りたい。

4. 研究成果の公表および活用

成果の公表：24年度の青森県保健医療福祉研究発表会および理学療法関連の学会で発表予定。

成果の活用：理学療法学科3年次地域理学療法の「対人援助技術の習得(コミュニケーションを中心に)」、1年次臨床基礎実習の事前学習「対象者との接し方・コミュニケーション」でコーチングを採用して授業予定

あなたとともに一胎児・新生児のお子さんを亡くされた家族へー

作成者：大井けい子¹⁾

1) 青森県立保健大学

1. 要旨

ブックレット(初版)は平成19年に発行され、県内11病院へ配布された。ここ数年、各病院から残部があれば送付願いたいとの要請を受けていた。そこで、今回リニューアル版として再版した。このブックレットは母親の悲嘆の様相や別離の再親として子どもにできることはもとより、さらに父親が体験するであろう困難や夫婦の人間関係についての助言をさらに付け加えた。

また冊子のサイズを、A5からA4に変更し、挿絵も心温まるよう苦心した。

2. 冊子の体裁

A4 全15ページ カラー版

3. 活用方法

配布先リスト(配布数)

- ・青森県立中央病院 (100)
- ・青森市民病院 (100)
- ・弘前大学医学部附属病院 (100)
- ・国立病院機構 弘前病院 (100)
- ・三沢市立三沢病院 (100)
- ・八戸市立市民病院 (100)
- ・むつ総合病院 (100)
- ・五所川原市立西北中央病院 (100)
- ・八戸赤十字病院 (100)
- ・あおもり共立病院 (100)
- ・弘前健生病院 (100)
- ・青森県 母子のメンタルヘルス研究会 (500)

3. 国際科事業報告

平成 23 年度韓国仁済(インジェ)大学校との日韓国際交流報告

- ・23 年度は東日本大震災の影響で学生間の交流事業は中止となった。
- ・次年度以降について協議するため、理学療法学科李講師がインジェ大学校へ伺い、青森県の現状および本学での災害時の対応に関して説明した(平成 23 年 11 月 30 日～12 月 4 日出張)。韓国国内では福島県をはじめ東北地方の放射能汚染を心配しており、特に学生の保護者が危惧を抱いているため来青希望の学生が減る可能性もあるとのことだが、現段階では例年通り 24 年度の学生間交流を実施する予定で準備を進めることとなった。

(担当者:理学療法学科 藤田智香子)

English Café

On the Open Campus day, 8th August 2011, AUHW English teachers hosted an ‘English Café’ for visitors to the university. Light refreshments (tea, coffee, snacks) were offered to guests, who were invited to meet English teachers and converse in English in a relaxed atmosphere. The event attracted a steady flow of visitors throughout the afternoon.

Alan Knowles

平成 23 年度国際協力市民公開講座

《開催日》

平成 23 年 10 月 8、9 日 (両日とも 10 : 00～16 : 00)

《内容》

1. アフリカの国々の生活を紹介する写真 (A3 サイズで 25 枚展示と写真冊子の自由閲覧)
2. フィリピンのクリスチャンスクールでの活動の紹介 (A4 サイズ 30 枚展示)
 - a. 修学旅行
 - b. 小学校への体験入学 (PAJAMA DAY として)
 - c. 特別支援学級の授業
3. ブラジルの老人保健施設の紹介 (A4 サイズ 7 枚展示)
4. ミャンマーの病院の紹介 (A4 サイズ 8 枚展示)
5. 東日本大震災に対する世界各国からのメッセージ写真 (30 枚展示)
6. セネガルに行かれた青年海外協力隊隊員の後援

10 月 9 日 13 : 00～14 : 00 佐々木 理江さん

《来場者》

8日：写真展来場者：70名

9日：写真展来場者：133名

講演会来場者：20名

2日間総来場者数：223名(来場者数は、カウントできた最少人数)

《アンケート》

◎写真展アンケート回答者：17名（10代4名、20代6名、30代2名、40代3名、50代2名）

- ・このようなイベントはあったほうが良い。
- ・写真展が学祭にあるのは良い（知らない世界を知れる）。
- ・もっとたくさんの人に世界を知ってほしい。
- ・外国の方が日本の復興を応援してくれている写真を見て自分たちも頑張らなければと思った。
- ・JICAで日本に来ている人に話をしてもらっては？

◎講演会アンケート回答者：16名

隊員の方がとても小柄な若い女性だったため、

本当にあなたが行ってきたの？

治安は大丈夫だったの？

セネガルで3年近く生活してきたことだけすごいです。

等、仕事より隊員を心配する声が多数あった。

《その他》

- ・小学生からご年配の方まで、幅広い年齢層の方に来場頂いた。
- ・市民公開講座として、多くの学外の方に来場頂けたのではないかと。
（本学の学生及び卒業生、教職員の来場者で確認できた数が33名）
- ・開催場所が、学祭実行委員会側の都合でB112からB111に急遽変更となった。
- ・講演会の時間が外のイベントと重なったため、聞きたかった人が来られなかった。
- ・準備は、関係者3名、学生3名で行った。
- ・片付けは、関係者3名で行った。

(担当者:理学療法学科 長門五城)

講演会

平成24年1月18日(水)17時10分から18時30分まで、青森県立保健大学A107教室において、「海外での体験がいかに人生を豊かにするか」をテーマにシンポジウムを開催した。3人の講師と本学 English Communication 参加学生より海外に行った動機・きっかけ、そこでの経験とその経験が現在の自分に及ぼす影響、将来の展望についてご講演いただいた。

《講演概要》

1. JICA 国際協力推進員：越善 啓氏

人と違うことがしたいという考えから青年海外協力隊員に応募し、PC インストラクターとしてカンボジアに派遣された。そこで「人は人のために生きている」ことを実感した。今努力していれば将来も努力できる、ネットワークよりフットワークである。

2. 青森県国際交流員：バス・ザカリー氏

出身地のニューハンプシャー州に日本の中学生が短期訪問したことがきっかけで日本に興味を持ち、高校生の時に徳島に留学した。その後も多彩な国際交流事業やボランティア活動を行い、国際交流の仕事の面白さに目覚めた。海外では苦労はあるが、様々な「new」が得られる。

3. 青森大学教授：澁谷 泰秀先生

留学での経験をどのように受け止めるかは、パーソナリティやストレスコーピングスキルなどによるところが大きく、留学はパーソナルな体験である。まったく異なる心理的フレームを持っている人たちと同じ社会に住むことで、自分の心理的フレームを疑う態度が身につくということが、留学体験で学べることである。

4. 青森県立保健大学 English Communication 参加学生

イギリス組(3名)およびオーストラリア組(2名)から発表。それぞれの学生の English Communication に参加したきっかけ、現地で直面した困難とそれをどう乗り越えたか、楽しかったこと、今後の展望等、写真を交えて紹介。



本講演会は主に若者の海外への興味や関心を高めることを目的に開催し、参加者の多くは本学の3年生であった。講演会終了後のアンケートでは参加者全員が参加してよかったと回答しており、その理由として、海外で自分の専門性を発揮する活動をされた方の話を聞き学びになった、日本人の海外留学経験だけでなく外国籍の方の日本への留学経験談が聞いてよかった、同年代の学生が広い視野を持っていることがわかり刺激になった等の意見があった。さらにほとんどの参加者が海外へ興味を持ったと回答しており、講演会の目的は達成された。

(担当：大関信子・大崎瑞恵)